

Adult Attachment Interview の 臨床への適用とその展望

上 野 永 子

I. はじめに

Bowlby (1969, 1973, 1980) の提唱した愛着理論は, Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) が, 乳幼児の愛着の個人差を行動レベルで測定する Strange Situation Procedure (以下, SSP) を開発したことに伴い, 愛着に関する実証的研究が可能になり, 発達心理学の領域で発展を遂げてきた。SSP の対象が乳児期であったため, 当初の愛着研究は, 乳児期を対象に行われてきたが, 表象レベルの愛着について論じられるようになり, 愛着研究を思春期以降に適用する流れの中で, 思春期以降の愛着の個人差を測定するツールとして Adult Attachment Interview (以下, AAI ; George, Kaplan & Main, 1984) が開発された。そのことにより, 愛着研究は対象が思春期以降に広がり, 愛着パターンの縦断的連続性の実証 (Hamilton, 1995) や世代間伝達の実証 (Van Ijzendoorn, 1995), 愛着パターンと精神病理の関連についての実証 (Hesse, 1999) を可能にし, その研究領域を広げていったのである。Bowlby は臨床的関心から出発して愛着の重要性を認識したが, Bowlby の当初の思いとは裏腹に愛着の実証研究は愛着の標準的な発達と健常範囲内における個別的特徴の解明をテーマとするもの (遠藤, 2007) であった。しかし, AAI の開発が, 愛着と精神病理の関連の検討を可能にし, 現在では臨床家による愛着理論への注目が高まりつつある。Fonagy (2001) に代表される精神分析に関心をもつ臨床家が愛着理論を精神分析の観点から捉え直そうとする動きがあ

り、AAI というツールを得た愛着研究は新たな局面を迎えていると言えるだろう。本稿においては、AAI とは一体どのようなものなのかを概観し、臨床への AAI 適用の展望について述べることを目的とする。

II. AAI とは

AAI は、Main を中心とする Berkley での研究において、SSP によって測定された子どもの愛着の個人差が養育者側のどのような要因によるのかを検討する試みの中で開発されたものである（遠藤，2006）。SSP は、乳児の愛着を養育者との分離と再会という構造化された設定の中で判定する、子どもの行動上の違いによって、愛着を 3 類型もしくは 4 類型（回避型（A）・安定型（B）・アンビバレント型（C）・4 類型の場合それに加えて無秩序型（D））に分類するものであり、AAI も SSP に対応する形で愛着の個人差を 3 類型もしくは 4 類型（愛着軽視型（Ds）・安定型（F）・とらわれ型（E）・4 類型の場合それに加えて未解決型（U））に分類するものである。それでは、AAI はどのような方法で愛着分類を行うのであろうか。次に、AAI の評価システムについて、Adult Attachment Scoring And Classification System（Main, Goldwyn & Hesse, 2002）に基づき概観したい。尚、筆者は 2006 年と 2007 年にサンディエゴで行われた Main らの主催する AAI のワークショップに参加し、2008 年に、AAI の正式な認定コーダーの資格を得ている。

II-1. AAI の実施要領

AAI は、所要時間が 1 時間程度の半構造化された面接法であり、もともと低リスクサンプルの養育者を対象とした研究で利用されていたものであるが、現在では児童期や思春期（Ammaniti et al., 2000）、高リスクサンプルや臨床群にも適用（van IJzendoorn & Bakermans-Kranenburg, 1996）が試みられ、その対象は広がりを見せている。AAI の被験者は、自分の子ども時代の両親との関係について語るようにインタビュアーから促される。具体的には

Table 1 AAI の質問項目の簡略版 (Hesse, 1999)

1. まず、あなたの子供時代の家族構成、どこにお住まいになっていたか等からお話していただけますか？
2. あなたの小さい頃の御両親との関係をできるだけ小さいころにさかのぼってお話していただきたいのです。
- 3/4. 子ども時代の（母／父）との関係を描写するような言葉を5つ教えてください。私が、それらを書きとめ、その後どうしてその言葉を選んだのかについてエピソードなどをお尋ねします。
5. ご両親のどちらにより親近感を持っていましたか。また、それはどうしてですか。
6. あなたが感情的に混乱した時、あなたはどのようにしましたか。また、どうなりましたか。特に思い出すエピソードはありますか。けがをしたときは。病気のときは。
7. 両親と最初に離れたときのことを覚えていますか。
8. 子ども時代、両親から拒絶されたと感じたことはありますか。そのとき、あなたはどのようにしましたか。両親は、子どもを拒絶したと自覚していたと思いますか。
9. 両親に、恐らくしつけのためか或いは半分冗談で、脅されたことなどありましたか。
10. 御自分の御両親との全般的な経験が今の御自分にどのような影響を与えたと思われますか。子供時代の経験がご自分の成長の過程において何らかの否定的な影響を及ぼしたと思われる事などありますか。
11. 子ども時代、両親がそのようにふるまったのはどうしてだと思いますか。
12. 子供の頃に、親のように慕っていた他の大人の方はいましたか。
13. 子供の頃に、御自分の親か他の家族の一員、例えば兄弟とか他の近しくしていた親戚がお亡くなりになった経験はありましたか。
14. 子供時代の頃と比べて、御両親との関係にいろいろと変化があったと思いますか。
15. 現在のあなたと両親との関係はどのようなものですか。

(注) ここで示した質問項目は Hesse (1999) によって公開されたものに基づいたものである。しかし、実際の AAI 実施の際には、ここに示した質問項目以外にインタビューの応答の仕方によって追加の確認項目が実施される。

Table 1 に AAI の質問項目を示した。両親との関係をたずねるのは、多くの場合、両親が被験者にとって愛着対象であろうという仮定があるからである。そのため親と離れて暮らしていた被験者や両親と暮らしていても両親以外の人物（例えば祖母）が愛着対象であったと考えられる被験者に対しては、その人物との関係についてもたずねることになる。

AAI はリラックスできる環境の下で実施され、インタビュー内容は全て録音される。録音された内容は、うなずきや笑い⁽¹⁾、沈黙も含めて全てデータ

として書き起こされ、愛着分類のために利用される。

II-2. AAI の評定システム

AAI の評定システムは、愛着対象との経験について評価する **Experience scale** と愛着対象に対する現在の心的状態を評価する **State of mind Scale** の大きく二つの領域があり、それぞれマニュアルに従いその程度について 9 段階で評定される。具体的には、Table 2 に示した。

Table 2 に示したスケール全てに対して愛着対象ごとに（多くの場合、父親と母親）それぞれ 9 段階で評定し、Main, Goldwyn & Hesse (2002) が示したそれぞれの愛着パターンの典型的スコア例である **Expectable Relationships Between Rating and Adult Attachment Classifications and Sub-Classifications** のスコアに基づいて、愛着パターンの分類を行う。これは、ボトムアップによる分類と言われるものであり、その後、トップダウンによる分類が行われる。トップダウンによる分類とは、それぞれの愛着パターンの典型的な語り方の特徴とどの程度、インタビューデータの語り方が一致しているかによって決定される。たとえば、被験者が「覚えていない」という発言を繰り返す語り方は、トップダウンによる評定では愛着軽視型（Ds）の特徴を強く持つインタビューデータということになる。ボトムアップとトップダウンによる分類が一致して最終的な愛着分類となる。愛着パターンごとの典型的な語

Table 2 AAI の評定システム (Main, Goldwyn & Hesse, 2002)

Experience scale

- ① 拒絶・・・養育者が子どもを拒否したり、子どもが怪我をしても取り合わなかったりすることの程度。
- ② 巻き込み／役割逆転・・・養育者が子どもに対してなすべき物理的・心理的ケアを子どもが養育者に対して行うことの程度。
- ③ 達成することに対するプレッシャー・・・学業や家事などを達成するようにプレッシャーをかけ、失敗した場合、優しさのないふるまい (unloving behavior) をとることの程度。
- ④ 無視・・・養育者が多忙・もしくは精神的不適応状態にあるために、自宅にいても子どもに接する時間がないことの程度。
- ⑤ 愛情・・・抱きしめるなどの愛情のこもった行動の程度。

State of mind scale

- ① 理想化・・・養育者に対する評価と、それを裏付けるエピソードの矛盾の程度。例えば、「母親はとても愛情に満ちた人だった」と語る一方で、他のインタビューデータの箇所では、母親からの拒絶の態度について語り、先の語りと矛盾がみられた場合、母親を理想化していると評価される。
- ② 捉われた怒り・・・養育者に対して感情的に捉われた結果としての怒りの程度。例えば、「父親は悪魔のような人だった」と語ったのち、いかに父親が自分に対してひどい仕打ちをしたのかを延々と語り続けた場合、父親に対して捉われた怒りがあると評価される。
- ③ 養育者への侮蔑・・・養育者を侮蔑したり、愛着関係を軽視したりする程度。例えば「母親との関係らしきものは何もなくあった」と語った場合、愛着を軽視しているとして評価される。
- ④ 記憶の欠如・・・養育者との関係を思い出せないと主張する程度。
- ⑤ メタ認知モニタリング・・・面接中に自分の思考や想起をモニタリングする程度。例えば、父親が弟をひいきしていたという語りに対して「これは私の視点であって、弟にはまた別の視点があるかもしれない」といった物事の多様性を認識している程度。
- ⑥ 会話における消極性や曖昧さ・・・曖昧な表現や文章が未完成のままであったり、主語が混同したりする程度。
- ⑦ 喪失に対する恐れ・・・わが子を失うのではないのかという、根拠のない恐れに対する程度。
- ⑧ 未解決の喪失体験・・・愛着対象の喪失体験を受容できているかどうかの程度。例えば、祖母は死んでいるにも関わらず、インタビューの中で「今日の日曜日には祖母に会いに行こうと思っている」といった語りがみられる場合、未解決の喪失体験をもつと評価される。
- ⑨ 未解決の被虐待体験・・・心的外傷体験が未解決である程度。明らかに虐待の証拠があるにも関わらず、「それは虐待ではない」というような語りがみられた場合、未解決の被虐待体験をもつと評価される。
- ⑩ 語りの一貫性・・・Grice (1975) の4つ会話の公準を評価の基準としている。語りの質（語りに矛盾がないか。理想化した語りは語りの質に関する公準に反する）、語りの量（質問に対して適当な量で語っているか。「覚えていない」ばかり語ることは、語りの量に関する公準に反する）、語りの関連性（質問された事柄について適切に語っているか。過去のことをたずねているのに、現在のことを話す語りは、語りの関連性に関する公準に反する）、語りの様式（語りの様式は適切か。専門用語を駆使して堅苦しく語ったり、逆に意味のない言葉を言ったりする語りは、語りの様式に関する公準に反する）
- ⑪ 内的思考の一貫性・・・インタビュー全体を通じての内的思考の一貫性の程度。

(注) ここで示したのは、マニュアルに記載されている一例であり、実際のマニュアルには、評定する際の注意事項などが詳細に記述されている。

り方について Table 3 に示した。

先に述べたように、AAI の愛着分類は SSP の愛着分類に理論的対応が仮定されている。つまり、SSP における再会場面で養育者に対して回避的な行動

Table 3 AAI によるそれぞれの愛着パターンの語り方の特徴
(Main, Goldwyn & Hesse, 2002)

愛着軽視型 (Ds) : Grice の語りの質や語りの量の公準に反する。養育者を非常に肯定的に語ることに反して、それを裏付ける具体的エピソードに乏しい、もしくは、怪我をして怒られた経験をもつことなどを語り、語りに矛盾がみられる。また、理想化とは逆に、養育者について侮蔑的に語ることもある。過去についても「覚えていない」という主張を繰り返すこともあり、自身の人格形成に養育者との関係は影響がないと語る。

自律型 (F) : Grice の公準に反しない。養育者との肯定的・否定的な経験両方について首尾一貫して語り、語る内容に矛盾がほとんどない。養育者との関係が自分に影響を与えたことに気づいており、それらについてオープンに語る。

とらわれ型 (E) : Grice の語りの量、語りの関連性と語りの様式の公準に反する。養育者との過去の記憶についてたずねられているにも関わらず、現在の養育者との関係について語ったり、被験者自身の子どもとの関係について語ったりする。また、あいまいな表現で語ったり、養育者について、怒りに捉われ延々とその怒りを語る。親子の役割逆転もみられ、子どもが養育者を過度に喜ばせようと努めたり、養育者がそれを求めたりすることもある。

未解決型 (U) : インタビュー全体を通して、一貫性に欠くというわけではないが、喪失や虐待に関する語りについて、メタ認知機能が崩れる。死者について現在形で語り、まるで生きているかのような表現をしたり、根拠がないにも関わらず自分のせいで死んだのだと確信する魔術的思考をもっていたりする。虐待については、その存在が明らかであるにも拘わらず、虐待について否認したり、現在もその虐待者について恐れていたたり、自分の子どもにも同じようなことをしてしまうのではないかと恐れていたたりする。

(注釈 1) 未解決型 (U) と評定された場合、第二カテゴリーとして愛着軽視型 (Ds) 自律型 (F) とらわれ型 (E) のいずれかが評定される。また最近ではいずれの分類にも評定されない分類不能 (CC) の存在が明らかになっている。

(注釈 2) ここで示した愛着類型の特徴は、マニュアルに示された代表的なものを記述したに過ぎない。実際マニュアルには、それぞれの愛着パターンを分類する上で必要な情報が詳細に記述されている。

をとる回避型 (A) には、養育者との記憶について、容易にアクセスできずに、理想化したり、「覚えていない」と語る愛着軽視型 (Ds) に対応し、養育者に積極的に接近し、精神的安定を得る安定型 (B) には、養育者との関係を包み隠さずオープンに語る自律型 (F) が対応し、養育者へ身体接触を求めながらも、養育者に怒りを表現し叩いたりするアンビバレント型 (C) には、養育者との記憶について語る際に、とらわれた怒りのために、延々とその怒りを語ったり、曖昧な表現ばかりで語るとらわれ型 (E) が対応し、顔を背けながら養育者に近づいたり、近づいてきたかと思えば膝をついて倒れこむような行

動をとる無秩序型（D）は、喪失や虐待について、その存在が明らかであるにも関わらず否認したり、語り方に混乱のみられる未解決型（U）に理論的に対応することが仮定されているのである。しかし SSP が、子どもの行動上の養育者への接近の在り方を問題するのに対して、AAI では、表象レベルでの養育者への接近を問題にしているという点に違いがある。

II-3. AAI と他のインタビュー調査

遠藤（2006）は、AAI について「基本的に“何を（what）”よりも“いかに（how）”を重視」することを指摘している。通常、インタビュー調査では、インタビュアーが語った内容こそが分析されるべき重要なデータである。これは、臨床場面で導入される生育歴調査においても、同様である。しかし、AAI における愛着分類の際には、語られた内容そのものではなく、インタビュー全般を通して語られたその内容に矛盾点がないかやインタビュアーに対してオープンに語ろうとするのかといった“語り方”が重要なデータとなり得るのである。

例えば、被験者が幼少期に養育者との関係において、拒絶や無視の経験を数多くしていたとしても、その事柄について首尾一貫してオープンに語ることができたのであれば、被験者は自律型（F）と評定されるのである。また、養育者について「母親は最低な女だった」と侮蔑的な内容を語ったとしても、その後、それ以上母親に対する言及を避けようとする被験者は、愛着軽視型（Ds）と評定され、母親がいかに最低な女であったのかを延々と語り続ける被験者はとらわれ型（E）と評定される。このように、語られた内容が同じであったとしても、その語られ方の違いによって、愛着分類は別のものになるのである。

II-4. AAI と他の愛着測定用具

成人の愛着を測定するツールとして、主に社会心理学やパーソナリティ研究の分野で多く使用されているのが、質問紙法である。質問紙には、Hazan

& Shaver (1987) による “Attachment Style scale”, Bartholomew & Horowitz (1991) による “Relationship Questionnaire”, Griffin & Bartholomew (1994) の “Relationship Styles Questionnaire” がある。また, Brennan et al (1998) が開発した “Experiences in Closed Relationships inventory (以下, ECR)” には, 高い信頼性と構成概念妥当性や予測妥当性があるということが見出されており (Shaver & Mikulincer, 2002), 質問紙法による多くの研究で用いられている。日本においても, ECR が中尾・加藤 (2004) によって翻訳され広く使われている。その他, 日本で作成された質問紙としては詫摩・戸田 (1988) の成人版愛着スタイルがある。このように成人愛着の測定用具は多岐に渡っているが, どの測定具にしてもその妥当性を検証するためには, ゴールドスタンダードと言われる愛着パターンの測定方法である AAI との関連をみることで, その妥当性を検証しており (長沼, 2005), 成人を対象とする愛着研究のフィールドにおいて, AAI は「確実に標準的ツールとなりつつある」(遠藤, 2006) のである。

それでは, なぜこれほどまでに愛着研究において AAI が躍進したのであるうか。それは, AAI が「無意識をおびやかす (George et al., 1996)」面接技法であり, 質問紙法では測定できない無意識レベルの愛着に関する情報について抽出が可能であることがあげられるであろう。Jacobitz et al (2002) は, 質問紙法で広く使用されている ECR が恋愛対象との意識的評価を活性化させているのに対し, AAI は子ども時代の愛着経験について語る中で被験者の情動統制における無意識のプロセスを活性化させていると述べ, さらに ECR では愛着軽視型 (Ds) やとらわれ型 (E) のそれぞれ特有の情報処理方略 (例えば, 愛着軽視型 (Ds) の人は, 愛着に関する記憶へのアクセスを制限する) を捉えきれていないとして AAI の優位性を主張している。また, Waters et al (2002) は, 親密性や結婚満足度, 抑うつといった他の心理学的構成概念と ECR によるデータに相関がみられることから, ECR の弁別妥当性について問題視している。

以上の点から, AAI は煩雑なコーディングシステムであり, 研究に際して

時間的コストが膨大であるにも拘わらず、質問紙法に比して AAI の優位性を支持する愛着研究者によって現在の地位を築きあげたといえることができるだろう。

II-5. AAI の日本人への適用に関する問題

AAI の実施は、Main らが主催する日本国外の 2 週間に及ぶワークショップに参加し評定に関するトレーニングを受けた後、最短 1 年半要する AAI による愛着分類の評定に関する信頼性テストに合格した AAI の認定コーダーにのみ許可されている。英語を母国語としない日本人にとって AAI の認定コーダーとなること自体が大きな壁となっていることもあり、日本において AAI を用いた研究は少ない。そのため、日本人の AAI データに関する先行研究が少ない状況である。しかし、そんな中で AAI の日本人への適用に関して問題とされていることについて触れたい。

日本で初めて AAI を実施した数井ら（2000）の結果も、佐々木ら（2003）、長沼（2005）、Behrens et al（2007）の結果も、未解決型（U）及び分類不能（CC）がそれぞれ 4/50, 1/88, 9/102, 11/43 となっている⁽²⁾。世界の AAI を用いた研究をメタ分析した van IJzendoorn & bakermans-Kranenburg（1996）の報告によれば、未解決型（U）及び分類不能（CC）の出現率は健常群の母親で 19% となっており、これらと比較すると日本における未解決型（U）及び分類不能（CC）の出現率は相対的に少ないと言えよう。このことについて数井ら（2000）は、未解決型（U）の判断基準をお盆に死者が戻ってくると考えられるような日本の文化や宗教的背景を鑑みて評定したため、欧米においては未解決型（U）と評定されるデータを未解決型（U）と評定しなかったと述べている。また、佐々木ら（2003）は、未解決型（U）が全くみられなかった理由として、キリスト教を中心とする文化圏では未解決型（U）と評定される可能性のある「生まれ変わりや虫の知らせといった思想や宗教観」は、日本人の一般的な考え方であるとして、未解決型（U）と評定しなかったためとしている。筆者が得た日本人の AAI データにおいても、「(死んだ

祖父母の家に）成人式には振袖を着て見せに行きたい」という語りがみられた。これは仏前に見せに行くことを意図していることが考えられるが、このような日本人のデータを未解決型（U）とするのは、適切ではないであろう。未解決型（U）の評定には日本独自の基準が必要になると思われる。

また北山（1998）は、文化心理学の立場から、中国や日本のような非欧米圏では、感情の知覚よりも「疲れ」や「肩こり」といった身体症状がみられやすく、喪失の悲しみという内的感覚を身体症状化することで、自分の感情と切り離す傾向があることを述べている。このことから佐々木ら（2003）は、日本人への AAI の適用の際には喪失体験を契機とした身体症状についても、分析のデータとして考慮に入れる必要性を指摘している。

さらに AAI においては、会話における曖昧さや主語の混同を、問題としているが、日本語の日常的な会話においては、語尾を曖昧にする表現（例えば、「父は非常に厳しかったように思うんですけども・・・」など）や、主語が明確に示されない表現は日常的なものであり、それをどこまで英語主体で検討されてきた AAI の評定法を日本人の AAI データに適用するかが問題になってくる。

以上のように、日本人への AAI の適用については、文化の違いと言語の特徴の違いについて考慮した上で、日本独自の評定基準を検討する必要があるであろう。

III. AAI の臨床への適用

2008 年 3 月にカリフォルニアで AAI の臨床への適用を主題として Conference が開催されるなど、AAI を臨床現場で用いることは世界的に注目されている事柄である。次に、AAI が愛着分類を超えて、どのような利用可能性があるのかについて検討してみたい。

III-1. AAI によって測定される治療の効果

Diamond ら（2003）は、愛着軽視型（Ds）、とらわれ型（E）、未解決型（U）の愛着パターンをもつ 5 人の患者に対して、精神分析的な精神療法開始 4 カ月後と 1 年後に AAI を実施して、その愛着パターンの変化をみた。結果、5 人中 2 人が自律型（F）へ移行していることがわかった。また、精神疾患をもつ患者 82 人に対して、精神分析的な精神療法導入前に AAI を実施し、治療開始 1 年後に GFA 得点⁽³⁾による症状の改善について検討した Fonagy ら（1996）の研究では、40 人の患者に改善がみられ、愛着軽視型（Ds）の患者の改善の割合が、他の愛着パターンの患者と比べて、高いことが示された。これらの結果は、精神分析的な精神療法の治療効果について実証の可能性や、精神分析的な精神療法の適用を検討する際に、治療効果が期待できるかどうかについての予測を可能にすることが考えられる。治療にエビデンス・ベースが求められる今日、このことが臨床家の AAI に対する関心を示す一つの要因となっていると言えるだろう。

Fonagy（2001）は精神分析的な愛着理論家の一人である Holmes が「心理療法における作業は、物語（story）を作ることと壊すことの両方を含んでおり、治療者は、患者が物語を一貫した形で語り得るようになることと、それまでとは異なる、おそらくはより治療的な意味を持った物語を語り得るようになることの両方を同時に援助する」としていることを紹介している。心理療法の目的が、一貫した語りへと変化を促すことであるならば、AAI を治療効果の測定ツールとして利用することは理にかなっていると言えるだろう。

III-2. AAI が臨床において予測するもの

AAI において未解決型（U）と測定された人は、解離傾向がより強い（Hesse & Main, 2000）ことが指摘されており、また未解決型（U）やとらわれ型（E）は、深刻なトラウマに関連した精神病理を有するグループ（Fonagy et al., 1996）や犯罪を犯し有罪判決を受けたグループ（Levinson & Fonagy, 2004）、親密な他者に暴力をふるう人たちに見出される愛着パターンである

(Owen & Cox, 1997) ことが示唆されている。

また、AAI によって分類された患者の愛着パターンの特徴、すなわち表象レベルでの養育者への接近の在り方は、治療場面において患者と治療者の関係を予測する可能性がある。Dozier & Bates (2004) は、治療に際して愛着軽視型 (Ds) の患者は、実際よりも過小な症状しか報告せずに治療者の治療的介入を回避し、とらわれ型 (E) の患者は、過去や現在の人間関係の問題を過度に報告し、非建設的な議論に終始しがちであることを指摘している。このことから、AAI を用いることで治療者は、患者の訴えについて過小評価する間違いや、患者の訴えを過大評価する間違いに陥る可能性を弱めることになるだろう。長沼・大西 (2007) は、愛着分類を知ることで、幼少期の重要な他者との関係が治療関係に再現されるという精神分析的な心理療法場面において、患者がどのような関係性を治療者と築こうとするのか (精神分析用語ではどのような転移を向けてくるのか) についての情報が得られるとしている。これらの情報が治療開始前の段階で得られることは、治療者に今後起こりうる患者とのやりとりを予測させ、その対応について準備することができる。例えば、とらわれ型 (E) の患者は治療者に対して容易に攻撃性を向けてくる可能性があるだろう。そのようなことが起こってきた場合であっても、あらかじめ患者の愛着パターンについて治療者が知っていることで、患者の攻撃性に圧倒されることなく適切に対応することが可能になるであろう。さらに、心理的不適応にある青年は、総じて本人が治療を求めてくることは少ない。そのような場合であっても、青年の親に対して AAI を行うことで、そこから得られる過去の子どもに対する養育態度が憶測可能になり「青年の心理社会的発達上の問題に間接的に治療介入を行おうとする母親ガイダンスをする際に、治療者にとって貴重な情報となりうる」(長沼・大西, 2007) のである。つまり、親に対する AAI 実施は、単に親が意識している自身の養育態度について聴取することで得られる情報にとどまらず、親自身が無意識的に行うであろう養育態度についての予測が可能になるのである。瀬地山ら (2003) は、高リスクとされる多胎児の妊婦に対して出産前に AAI を実施して、愛着パターンを判定し、その妊婦の

対人パターンの特徴を把握した上で、心理的援助に活かす試みを行っている。

IV. 今後の展望

以上、述べてきたように **AAI** を臨床場面に適用することによって、単に患者の愛着パターンを測定するにとどまらず、治療の効果測定や患者の対人パターンを予測することが可能になるだろう。前者は治療技法の開発に、後者は治療方針を立てる際に、利用可能な情報を提供するものとする。

また、筆者の経験からは、**AAI** をクライアント⁽⁴⁾に対してセラピー前のアセスメント段階で実施することが、クライアントの自己内省的な心理療法への動機づけとなる可能性を感じている。筆者は、ある対人関係の問題を主訴とするクライアントにアセスメントの一環として **AAI** を行った事例を経験している。**AAI** 実施後、クライアントは「自分は小さい頃のことをいかに覚えていないのかわかった。」という感想を述べ、それを契機に、「自分の人生についても考えてみたい。」と語り、当初の主訴である対人関係の改善を目的に捉われずに自己を内省する精神分析的精神療法をクライアントに導入することとなった。このことから、**AAI** の実施が、クライアントの小さい頃からの人生を振り返ることを促し、その中で自分の今後の人生はどうありたいのかについて考えてみたいという欲求が生まれたことが考えられた。

また、**AAI** は子どもの心理的不適応を主訴とする親面接にも有効であると考ええる。上野（2008）が報告した娘の不登校を主訴とする母親面接では、面接が進む中で、母親自身の原家族の問題が語られ、そのことが不登校の娘との親子関係に影響していることが窺われた。当初、この事例においては障害を持つ兄の存在のために両親の関心が娘に向かないことによって、心理的不適応が生じていると見立てていたが、母親が原家族との問題について語ったことにより、セラピー経過の中で母親自身の問題と娘の心理的不適応が関係するであろうと見立てなおしがなされた。このような、子どもの心理的不適応に関する主訴で親がセラピストのもとを訪れた場合であっても、実際は親自身の子ども時

代を振り返ることが重要であるケースは多い。このような事例においては、あらかじめ親に対して **AAI** を実施しておくことで、親自身の抱える心理的な問題についてセラピストが情報を入手することが可能になる。このことは、子どもの問題でセラピーを求めた親に対して、親自身のセラピーの必要性について早期の段階で検討する材料となり得ることが考えられる。

V. おわりに

AAI は愛着の実証的研究の測定ツールにとどまらず、臨床場面への適用がおおいに期待されるものであることを述べた。しかし、**AAI** 自体は、先に述べた理由から、日本では多く利用されていない実情があり、日本における **AAI** のデータが決定的に不足していると言えるだろう。**AAI** の日本における発展は、今後 **AAI** 認定コーダー同士の連携が必須となってくるだろう。

注

- (1) うなずきや笑いは、書き起こしの対象となるものの、分類の際にはデータとして利用されない。
- (2) 分類不能 (CC) は佐々木ら (2003) 1 ケースと Behrens (2007) の 4 ケースである。
- (3) **GAF** 得点とは、**DSM-IV-TR** (American Psychiatric Association, 2003) に記載されている尺度で「精神的健康と病気という一つの仮想的な連続性に沿って、心理的、社会的、職業的機能を考えて、1 から 100 点までで評定される」ものである。
- (4) 筆者は医師でないために、医師が患者と称する人をクライアント、治療者と称する人をセラピストと呼ぶ。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Belhar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- American Psychiatric Association (2003) **DSM-IV-TR** 精神疾患の分類と診断の手引き. 高橋三郎, 大野裕, 染谷俊幸 (訳) 東京: 医学書院

- Ammaniti, M., Van IJzendoorn, M. H., Speranza, A. M., & Tambeli, R. (2000). Internal working models of attachment during late childhood and early adolescence: an exploration of stability and change, *Attachment & Human Development*, **2**(3), 328–346.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment style among young adult: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226–244.
- Behrens, K. Y., Hesse, E. & Main, M. (2007). Mothers' Attachment Status as Determined by the Adult Attachment interview predicts Their 6-Year-Olds' Reunion Responses: A Study Conducted in Japan. *Developmental Psychology*, **43**(6), 1553–1567.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss: Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss: Vol. 2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and Loss: Vol. 3.: Sadness and depression*. New York: Basic Books.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998) Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships* (pp 46–76). New York: Guilford Press.
- 遠藤利彦 (2006) 語りにおける自己と他者, そして時間: アダルト・アタッチメント・インタビューから逆照射して見る心理学における語りの特質. 心理学評論, **49**(3), 470–491.
- 遠藤利彦 (2007) アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する. アタッチメントと臨床領域 数井みゆき・遠藤利彦編著 (pp 1–58). 京都: ミネルヴァ.
- Diamond, D., Clarkin, J. F., Stovall-McClough, K. C., Levy, K. N., Foelsch, P. A., Levine, H., & Yeomans, F. E. (2003) Patient-therapist attachment: impact on the therapeutic process and outcome. In Cortina, M., & Marrone, M. (Eds.), *Attachment Theory and Psychoanalytic Process* (pp 127–178). Whurr Publishers, London
- Dozier, M. & Bates, B. C. (2004) Attachment state of mind and the treatment relationship. In Atkinson, L. & Goldberg, S. (Eds.), *Attachment issues in psychopathology and intervention* (pp 167–180). Lawrence Erlbaum, London.
- Fonagy, P. (2001) *Attachment Theory and Psychoanalysis*. New York: Other Press. [遠藤利彦・北山修 (監訳) (2008) 愛着理論と精神分析 (pp 150–174).

誠信書房]

- Fonagy, P., Leigh, T., Steel, M., Steel H., Kennedy, R., Mattoon, G., Target, M. & Gerber, A. (1996). The relation of attachment status, Psychiatric classification and response to psychotherapy. *Journal of Clinical Psychology*, **64**(1), 22–31.
- Gerge, C., Kaplan, N., & main, M. (1984). Adult Attachment interview. Unpublished manuscript, University of California. Berkley
- Gerge, C., and Solomon, J. (1996). Reprensentalational models of relationships : links between caregiving and attachment. *Infant Mental Health Journal volume* **17**, 198–216.
- Griffin, D. W. and Bartholomew, K. (1994). The metaphysics of measurement : The case of adult attachment. In K. Bartholomew and D. Perlman (Eds), *Advances in Personal relationships : Vol 5. Attachment Processes in Adulthood* (pp 17–52). London : Jessica Kingsley.
- Hamilton, C. E. (2000). Continuity and discontinuity of attachment from infancy through adolescence. *Child Development* **71**, 690–694.
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511–524.
- Hesse, E. (1999). The Adult Attachment Interview. In J. Cassidy and P. R. Shaver (Eds.), *In Handbook of Attachment : Theory, research and Clinical Applications*. (pp. 395–433). New York : Guilford.
- Hesse, E., & Main, M. (2000). Disorganized infant, child and adult attachment : collapse in behavioral and attentional strategies. *Journal of the American psychoanalytic Association* **48**, 1097–1127.
- Jacobitz, D., Curran, M., & Moller, N. (2002). Measurement of adult attachment : The place of self-report and interview methodologies. *Attachment and Human Development*, **4**, 207–215.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹 (2000) 日本人母子における愛着の世代間伝達. 教育心理学研究 **48**, 323–332.
- 北山忍 (1998) 自己と感情－文化心理学による問いかけ－共立出版株式会社
- Levinson, A., & Fonagy, P. (2004). Offending and attachment : the relationship between interpersonal awareness and offending in a prison population with psychiatric disorder. *Canadian Journal of Psychoanalysis*, **12**(2), 225–251.
- Main, M., Goldwyn, R., & Hesse, E. (2002). Adult attachment scoring and classification system. Unpublished Manuscript, University of California at Berkeley.

- 長沼佐代子（2005）成人における愛着の機能－AAIの愛着パターンと諸変数の関連－，白百合女子大学博士学位論文，未公開論文
- 長沼佐代子・大西美代子（2007）青年期の子どもとその母親の愛着パターンの関連－精神医学的親ガイダンスにおける事例－思春期青年期精神医学，**17**(2)，161－173.
- 中尾達馬・加藤和生（2004）成人愛着スタイル尺度（ECR）の日本語版作成の試み－心理学研究，**75**(2)，154－159.
- Owen, M. T., & Cox, M. J. (1997). Marital conflict and the development of infant-parent attachment relationships. *Journal of Family Psychology*, **11**, 152-164.
- 佐々木靖子，瀬地山葉矢，本城秀次（2003）Adult Attachment Interviewに関する予備的検討－日本の妊婦と青年女子の比較から－名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要．心理発達科学 **50**, 195-205.
- 瀬地山葉矢，佐々木靖子，金子一史，村瀬聡美，本城秀次(2003)愛着と Adult Attachment Interview. 精神科診断学 **14**(1)，19-28.
- Shaver, P. R., & Mikulincer, M. (2002) Attachment-related psychodynamics. *Attachment and Human Development*, **4**, 133-161.
- 詫摩武俊・戸田弘二（1988）愛着理論からみた青年の対人態度－成人版愛着スタイル尺度作成の試み－東京都立大学人文学報，**196**, 1-16.
- 上野永子（2008）前青春期心性をもつ母親との面接過程－セラピストがchumとして機能すること－心理臨床学研究，**26**(39)，302-313.
- Van IJzendoorn, M. H., (1995). Adult attachment representations, parental responsiveness, and infant attachment: a meta-analysis on the predictive validity of the Adult attachment interview. *Psychological Bulletin* **117**, 387-403.
- Van IJzendoorn, M. H. & Bakermans-Kranenburg, M. J. (1996). Attachment representations in mothers, fathers, adolescents, and clinical group: A meta-analytic search for normative data. *Journal of Consulting and Clinical psychology*, **64**(1), 8-21.
- Waters, E., Crowell, J. A., Elliott, M., Cororan, D., & Treboux, D. (2002). Bowlby's secure base theory and the social/personality psychology of attachment style: Work(s) in progress. *Attachment and Human Development*, **4**, 230-242.